資料渉猟余話

その148

郷土の歴史を語る

美術誌『もくろく』〈上〉

鎌倉貞男

南信州地域資料センターの美術関係コーナーには、旧華族や大名家を含む名家の「売り立て目録」が数冊ある。販売目的のために作成された美術品紹介目録である。

同誌の大きさや形状はまちまちで、厚さも異なる。全作品に通し番号が打たれ、出品作品が写真と文字で紹介されている。紹介作品の多くは軸装の日本画で、脇に作者名・作品名・寸法等が記されている。他に工芸品や道具類の紹介もある。

驚くことに、何冊かある内の四冊が飯田に関係した冊子である。(但し、内一冊は縮刷版で、事実上は三冊)『もくろく』と平仮名書きされた表紙をまくると、真ん中に「信州飯田町(市)○○家所蔵品入札」と大書され、側面に入札日や会場が併記されている。

今、その期日を基に右の冊子を時代順に並べると、①昭和二年五月(野原家)、②昭和三年六月(岩崎家)、③昭和十六年四月(伊原家)となる。いずれも下見の日と入・開札日が明記されていることから、売り立ては下見を経て入札制で行われたことがわかる。

次に、会場である。何と①と②は「東京市芝区愛宕下町四丁目 東京美術倶楽部」とあり、③は「飯田市仙寿楼」と記されている。(①と②は出版・発行も東京)つまり、①と②両家の作品は全て東京に運ばれ、東京美術倶楽部で売り立てられたのである。それだけ作品の質も信頼度も高かったのであろう。

続いて、裏面には札元が列挙されている。①は、東京の美術商四社(伊藤平山堂等)と地元美術商(犬塚八幡堂)である。②は、東京の美術商三社(川部商会等)と京都の美術商(今井貞次郎)と地元業者(太田蕉梧堂)である。③は地元業者九名を始め、東京・大阪・名古屋・桑名の各美術商である。

飯田に関係した『もくろく』三種四冊

いずれも実に大規模で広範囲な売り立てで、地元美術商が仲介をしたようだ。

参考までに記すと、①の作品数は五百四十七点、②は四百二十七点、③は八百五十点外で、どれもなかなか膨大な出品数である。

＊

実はこの種の話は、復刊『伊那』一号(昭和二七年刊)で初代原田島村が「骨董屋の移り変わり」と題し、また『黄眠先生が行く』(二〇一五刊)で嶋不濁が「売立はお祭り騒ぎ」と題してそれぞれ詳述している。

③に載る白隠の「白衣観音」

そこには当地で行われた大きな売り立てが実名入りで記されていて、明治から昭和にかけての郷土史の一端を窺うことができる。特に昭和初期が多く、大正末からの不景気と昭和恐慌・世界恐慌の影響がいかに深刻なものであったかを思い知らされる。

明治以降、飯田では十指に余る大がかりな売り立てがあったようだが、全てこうした目録を作成して行われたとは考えにくい。従って、その全貌を知ることはできないが、たまたま前記目録が現存したことにより、その売り立て品目をかなり明確に把握できる。格別にも、東京で行われた①と②がよくわかる。

こうしてみると、時代の大きな変動期に、飯田の富と文化の象徴とも言えるこうした文物が、飯田から流出したことは否みがたい。では、それらは一体どんなものだったのか、次回に具体的に見てみよう。